

深川の唄

永井荷風

青空文庫

よつやみつげ
 四谷見付から 築地両国行の電車に乗った。別に何処へ行く
 という当もない。船でも車でも、動いているものに乗って、身体
 を揺られるのが、自分には一種の快感を起させるからで。これは
 ニューヨーク
 紐育の高架鉄道、巴里の乗合馬車の屋根裏、セエヌの河船
 なぞで、何時とはなしに妙な習慣になつてしまつた。

いい天気である。あたたかい。風も吹かない。十二月も早や二
 十日過ぎなので、電車の馳せ行く麴町の大通りには、松竹
 の注目飾り、鬼灯提灯、引幕、高張、幟や旗のさまさま

が、汚れた瓦屋根と、新築した家の生々しい木の板とに対照して、少しの調和もない混乱をば、なお更無残に、三時過ぎの日光が斜めに眩しく照している。調子の合わない広告の楽隊が彼方此方から騒々しく囃し立てている。人通りは随分烈しい。

けれども、電車の中は案外すいていて、黄い軍服をつけた大尉らしい軍人が一人、片隅に小さくなつて兵卒が二人、折革包を膝にして請負師風の男が一人、掛取りらしい商人が三人、女学生が二人、それに新宿か四ツ谷の婆芸者らしい女が一人乗っているばかりであつた。日の光が斜めに窓からさし込むので、それを真面に受けた大尉の垢じみた横顔には剃らない無性髯が一本々々針のように光っている。女学生のでこでこした

ひさしがみ
 鹿 髪 が赤ちやけて、油についた塵が二目と見られぬほどきた
 ならしい。一同黙つていずれも唇を半開きにしたまま遣り場のな
 い目で互に顔を見合わしている。伏目になつて、いろいろの下駄
 や靴の先が並んだ乗客の足元を見ているものもある。何万円とか
 書いた福引の広告ももう一向に人の視線を引かぬらしい。婆芸
 者が土色した薄ぺらな唇を振じ曲げてチュウツチュウツと音高く
 虫歯を吸う。請負師が大 吠 の後でウーイと一ツ噁をする。車
 掌が身体を折れるほどに反して時々はずれる後の綱をば引き直し
 ている。

麴町の三丁目で、ぶら 提 灯 と大きな白木綿の風呂敷包
 を持ち、ねんねこ半纏で赤兎を負つた四十ばかりの醜い女房と、

ベエスボオルの道具を携えた少年が二人乗った。少年が夢中で昨日済んだ学期試験の成績を話し出す。突然けたたましく泣き出す赤児の声に婆芸者の齒を吸う響ひびきももう聞えなくなった。乗客は皆みんなな泣く子の顔を見ている。女房はねんねこ半纏ひもの紐をといて赤児を抱き下し、渋紙しぶかみのような肌をば平気で、襟えりあか垢かだらけの襟を割つて乳房を含ませる。赤児がやつとの事泣き止やんだかと思うと、車掌が、「半蔵門はんぞうもん、半蔵門でございます。九段くだん、市ヶ谷いちげや、本郷ほんごう、神田かんだ、小石川こいしかわ方面かたのお方はお乗換え——あなた小石川はお乗換ですよ。お早く願います。」と注意されて女房は真ま黒くろな乳房をぶらぶら、片手に赤児片手に提灯と風呂敷包みを抱え込み、周章あわてふためいて降り掛ける。その入口からは、待つていた乗客

が案外にすいている車と見るやなお更に先きを争い、出ようとす
る女房を押しかえして、われがちに座を占める。赤児がヒーヒー
喚わめき立てる。おしめが滑り落ちる。乗客が構わずそれをば踏み付
けて行こうとするので、此度こんどは女房が死物しにもものぐる狂いに叫び出した。
口癖になつた車掌は黄きいろい声で、

「お忘れものの御在ございませんように。」と注意したが、見るから
汚いおしめの有様。といつて黙つて打捨てても置かれず、詮せんかた方
なしに「おあぶのう御在ございますから、御ゆるり願ねがいます。」
漸ようやくにして、チインと引く鈴の音。

「動きます。」

車掌の声に電車ががたりと動くや否や、席を取りそこねて立つ

ていた半白はんぱくの婆ばあに、その娘らしい十八、九の銀杏返いちようがえし前垂まえだれ掛かけの女が、二人一度に揃そろって倒れかけそうにして危くも釣つり革かわに取りすがった。同時に、

「あいたツ。」と足を踏まれて叫んだものがある。半纏はんてん股引ももひきの職人である。

「まあ、どうぞ御免なすつて……。」と銀杏返は顔を真赤まっかに腰をかがめて会釈しようとする、電車の動揺でまたよろけ掛ける。

「ああ、こわい。」

「おかけなさい。姉さん。」

薄髻うすひげの二重廻にじゅうまわしが殊しゆしよ勝しょうらしく席を譲った。

「どうもありがとう……。」

しかし腰をかけたのは母らしい半白の婆であつた。若い女は丈のび伸をするほど手を延ばして吊革つりかわを握締にぎりしめる。その袖口そでぐちからどうかすると脇の下まで見え透すきそうになるのを、頻しきりと氣にして絶えず片手でメレンスの襦袢じゆばんの袖口を押えている。車はゆるやかな坂道をば静かに心地よく馳はせ下りて行く。突然足を踏まれた先刻さつきの職人が鼾声いびきをかき出す。誰れかが『報知新聞』の雑報を音読し初めた。

三宅坂みやげざかの停留場は何の混雑もなく過ぎて、車は瘤こぶだらけに枯れた柳の並木の下をば土手に沿うて走る。往來おうらいの右側、いつでも夏らしく繁しげつた老樹の下に、三、四台の荷車が休んでいる。二頭立だての箱馬車が電車を追抜けて行つた。左側は車の窓から濠ほりの景

色が絵のように見える。石垣と松の繁りしげを頂いた高い土手が、出
 たり這入はいつたりして、その傾斜のやがて静かに水に接する処、日
 の光に照らされた岸の曲線は見渡すかぎり、驚くほど鮮あざやかに強く
 引立って見えた。青く濁った水の面は鏡の如く兩岸の土手を蔽おほう
 雑草をはじめ、柳の細い枝も一ひとすじ条残さず、高い空の浮雲までを
 そのままはつきりと映している。それをば土手に群むらる水鳥が幾羽
 となく飛入っては絶えず、羽ばたきの水沫しぶきに動うごし砕く。岸に沿う
 て電車がまがった。濠の水は一層広く一層静かに望まれ、その端はす
 れに立っている桜田門さくらだもんの真白まっしろな壁が夕方前のやや濁った日の
 光に薄く色づいたままいずれが影いづれが実在の物とも見分けら
 れぬほど鮮かに水の面に映っている。間まもなく日比谷ひびやの公園外を

通る。電車は広い大通りを越して向側むこうがわのやや狭い街の角に止まるのを待ちきれず二、三人の男が飛び下りた。

「止りとまましてからお降り下さい。」と車掌のいうより先に一人が早くも転んでしまった。無論大した怪我けがではないと合点して、車掌は見向きもせず、曲り角の大厄難うしろ、後の綱のはずれかかるのを一生懸命に引直ひきなす。車は八重やえに重かさなる線路の上をガタガタと行悩んで、定めの停留場に着くと、其処そこに待っている一団の群集。中には大きな荷物を脊負った商人も二、三人交まじっていた。

例の上り降りの混雑。車掌は声こゑを黄きくして、

「どうぞ中の方へ願ねがいます。あなた、恐入りますが、もう少々もう最と一ツ先ひときの釣革つりかわに願ねがいます。込み合こみあいますから御懐中物を御用心ごしんしん。

動きます。ただ今お乗り換えの方は切符を拝見致します。次は数す寄屋橋きやばし、お乗換のりかえの方は御在かたいませんか。」

「ありますよ。ちよいと、乗ほんじよりかえ。本所は乗ほんじより換えじやないんですか。」髪を切り下げにした隠居風の老婆ろうばが逸いちはや早く叫んだ。けれども車掌は片隅から一人々々に切符を切きつて行く忙せわしき。

「往復で御在じっせんいますか。十錢銀貨で一錢のお釣で御在じっせんいます。お乗換は御在じっせんいませんか。」

「乗換ですよ。ちよいと。」本所行の老婆は首でも絞められるように、もう金切声かなきりごえになつてゐる。

「おい、回数券だ、三十回……。」

とりうちぼうふたこじましりはしおり
鳥打帽とりうちぼうに双子縞ふたごじまの尻端折しりはしおり、下には長い毛糸の靴足袋くつたびに編

上げ靴を穿いた自転車屋の手代とでもいいそんな男が、一円紙幣
 二枚を車掌に渡した。車掌は受取ったなり向うを見て、狼狽てて
 出て行き数寄屋橋へ停車の先触れをする。尾張町まで来ても回
 数券を持つて来ぬので、今度は老婆の代りに心配しだしたのはこ
 の手代で。しかしさすがに声はかけず、鋭い眼付で瞬き一ツせず
 車掌の姿に注目していた。車の硝子窓から、印度や南清の殖
 民地で見るような質素な実利的な西洋館が街の両側に続いて見
 え出した。車の音が俄かに激しい。調子の合わない楽隊が再び聞
 える。乃ち銀座の大通を横切るのである。乗客の中には三人
 連の草鞋ばき菅笠の田舎ものまで交つて、また一層の大混雑。
 後の降り口の方には乗客が息もつけなほほどに押合い今にも撲り

合いの喧嘩けんかでも始めそうにいい罵ののしつてゐる。

「込み合いますから、どうぞお一側ふたかわに願ねがいます。」

釣革をば一ツ残らずいろいろの手が引張ひづめつてゐる。指環ゆびわの輝く

やさしい白い手の隣りには馬蹄ひづめのように厚い母指おやゆびの爪そびが聳そびえて

いる。垢あかだらけの綿ネルめんシャツの袖そでぐち口は金ボタンのカフスと相あい

接あした。乗換切符の要求、田舎ものの狼狽ろうばい。車の中は頭痛のする

ほど騒さわがしい中に、いつか下町したまちの優しい女の話声も交まじるようにな

つた。

木挽町こびきちょうの河岸かしへ止とつた時、混雑にまぎれて乗り逃げしかけた

ものがあるとかいふので、車掌が向うの露地口ろじぐちまで、中折帽なかおれぼうに

提革包さげかばんの男を追いかけて行いつた。後あとからつづいて停車した電車

の車掌までが加勢に出かけて、おうらいぎわ 往来際にはすぐさま 直様物見高い見物人が寄り集つた。

車の中から席を去つて出口まで見に行くものもある。「けちけちするな——早く出さねえか——正直にぜに 銭を払つてる此輩こちとら いい迷惑だ。」と叫ぶものもある。

不時の停車を幸いに、おく 後れ走せにかけた二、三人が、あわてて乗込んだ。その最後の一人は、一時に車中の目を引いたほどの美人で、赤いてがらをかけた年は二十二、三の丸まるまげ 鬚である。オリブ色の吾妻あずま コオトの袂たもと のふりから二枚重にまいがさね の紅裏もみうら を揃そろ わせ、片手に進しんもつ 物の菓子折でもあるらしい絞りの福紗包ふくさづつみ を持ち、出口に近い釣革へつかまると、その下の腰掛から、

「あら、よし子さんじゃいらつしやいませんか。」と同じ年頃としごろ、同じような風俗みなりの同じような丸髻が声をかけた。

「あら、まア……。」と立っている丸髻はいかにもこの奇遇に驚いたらしく言葉をきる。

「五年ぶり……もつとになるかも知れませんわね。よし子さん。」

「ほんとに……あの、藤村ふじむらさんの御宅おたくで校友会のあつたあの時お目にかかったきりでしたねえ。」

電車がやつと動き始めた。

「よし子さん、おかけ遊ばせよ、かかりますよ。」と下なる丸髻は、かなりかなりに窮屈きうくつらしく詰つままっている腰掛こし掛けをグツト左の方へ押しつめた。

押詰められて、じじむさい襟えりまき卷ました金貸らしい爺おやじが不満らしく横目に睨にらみかえしたが、真まっしろ白しろな女の襟元えりもとに、文句はいえず、押し敷かれた古臭にじゆうまわい二重廻はねしの翼はねを、だいじそうに引取りながら、順送りに席いを居いぎった。赤あかいてがらは腰こしをかけ、両りょうそで袖そでと福ふくさ紗づつみ包ひざを膝ひざの上うへにのせて、

「校友会はどうしちまったんでしよう、この頃はさっぱり会費も取りに來ないんですよ。」

「藤村さんも、おいそがしいんですよ、きつと。何しろ、あれだけのお店ですからね。」

「お宅さままでは皆さまおかわりも……。」「

「は、ありがとう。」

「どちらまでいらっしやいますの、私はもう、すぐそこで下りますの。」

「新富町 ですか。わたくしは……。」

いいかけた処へ車掌が順送りに賃錢を取りに来た。赤いてからの細君は帯の間から塩瀬しおぜの小さい紙かみいれ入を出して、あざやかな発音で静かに、

「のりかえ、ふかがわ。」

「茅場町かやばちようでおのりかえ。」と車掌が地方訛いなかなまりで蛇足だそくを加えた。

真直まつすぐな往来おうらいの両側には、意気な格子戸こうしど、板塀いたべいつづき、磨すり

がらすの軒燈けんとうさてはまた霜よけた松の枝越し、二階の欄干てすりに

黄八丈きはちじように手拭地てぬぐいじの浴衣ゆかたをかさねた襦袢どてらを干した家もある。行

書で太く書いた「鳥」「蒲焼かばやき」などの行燈あんどうがあちらこちらに見える。忽たちまち左右がぱツと明あかるく開けて電車は一ひとすじ条の橋へと登りかけた。

左の方に同じような木造の橋が浮いている。見下みおろすと河岸かしの石垣は直線に伸びてやがて正しい角度に曲っている。池かと思うほど静止した堀割ほりわりの水は河岸かしどおり通に続く格子戸づくりの二階家から、正面に見える古風な忍しのびがえし返しをつけた黒板塀の影までをはつきり映している。丁度しおどき汐時しおどきであろう。泊とどまっている荷舟にぶねの苦屋根とまやねが往来よりも高く持上つて、物を煮る青い煙が風のない空中へと真直まっすぐに立昇たっている。鯉こいぐち口半纏こいぐちばんてんに向鉢むこうはちまき巻まの女房ふなばたが舷はたから子供のおかわを洗っている。橋の向むこうかど角かどには「かしぶね」と

した真白な新しい行燈と葭簀よしずを片寄せた店先の障子しょうじが見え、石垣の下には舟板を一枚残らず綺麗きれいに組み並べた釣舟が四、五艘そう浮いている。人通りは殆どほとんない、もう四時過ぎたかも知れない。傾いた日輪をば眩まぶしくもなく正面まともに見詰める事が出来る。この黄きいろ味の強い赤い夕陽ゆうひの光に照りつけられて、見渡す人家、堀割、石垣、凡すべての物の側面は、その角度を鋭く鮮明にしてはいたが、しかし日本の空気のは是非なさは遠近を区別すべき些さ少さうの濃淡をもつけないので、堀割の眺望ながめはさながら旧式の芝居ひらたの平い書割かきわりとしか思われない。それが今、自分の眼にはかえつて一層適切に、黙阿弥もくあみ、小団次こだんじ、菊五郎きくごろうらの舞台をば、遺憾なく思い返させた。あの貸舟、格子戸づくり、忍返し……。

折もよく海鼠壁なまこかべの芝居小屋を過ぎる。しかるに車掌が何事ぞ、

「スントミ町。」と発音した。

丸鬚の一人は席を立って、「それじゃ、御免ください、どうぞお宅へよろしく。」

「ちツと、おひまの時いらしツて下さい。さよなら。」

電車は桜橋さくらばしを渡つた。堀割は以前のよりもずツと広く、荷

船の往来ゆきぎも忙せわしく見えたが、道路は建て込んだ小家と小売店こうりみせの

松かざりに、築地つぎじの通りよりも狭く貧しげに見え、人が何なんという

事もなく入り乱れて、ぞろぞろ歩いている。坂本公園前さかもとに停車

すると、それなり如何いかほど待っていても更に出発する様子はない。

後あとにも先にも電車が止っている。運転手も車掌もいつの間によら

どこへか行つてしまつた。

「また喰くらつたんだ。停電にちげえねえ。」

糸織いとおりの羽織じじいに雪駄せつたばきの商人らっこが臘虎えりまきの襟えりまき巻ました赧あから顔あかの連あかれなる爺じじいを顧もえぎみた。萌黄もえぎの小包もえぎを首もえぎにかけた小僧いちはやが逸いちはや早く飛出いちはやして、「やア、電車の行列だ。先の見えねえほど続いてらア。」と叫ぶ。

車掌かばんが革包かばんを小脇かばんに押えながら、帽子あみだを阿弥陀あみだに汗あみだをふきふき駈かけ戻かつて来て、「お気の毒様あみだですがお乗りかえの方はお降りあみだを願あみだいます。」

声を聞くと共に乗客の大半は一度に席を立つた。その中には唇とがを尖とがらして、「どうしたんだ。よつぽどひまが掛かかるのか。」

「相^{あい}済みません、この通りで御在います。茅^か場^{やば}町^{ちよう}までつづいて

おりますから……。」

菓子折らしい福^{ふく}紗^さ包^{づつみ}を携えた彼の丸^{まる}髻^{まげ}の美人が車を下りた最後の乗客であつた。

二

自分は既に述べたよう何^{どこ}処^こへも行く当てはない。大勢が下車するその場の騒ぎに引入れられて何^{なに}心^{ごころ}もなく席を立つたが、すると車掌は自分が要求もせぬのに深^{ふか}川^{がわ}行^{ゆき}の乗^{のり}換^{かえ}切符を渡してくれた。

人家の屋根に日を遮さえぎられた往おう来らいには海老色えびいろに塗ぬり立てた電車が二、三町ちやうも長く続ついている。茅場町かやばちやうの通りから斜かためにさし込んで来る日光ひかげで、向角むこうかどに高く低く不揃ふぞろいに立たっている幾棟いくむねの西洋造りが、屋根と窓ばかりで何一ツ彫刻の装飾をも施さぬ結果であろう。如何いかにも貧相に厚みも重みもない物置小屋のように見えた。往來の上に縦横の網目を張はっている電線が透明な冬の空の眺望を目まぐるしく妨さげている。昨日あたり山から伐出きりだして来たといわぬばかりの生なまなま々しい丸太の電柱が、どうかすると向うの見えぬほど遠慮会釈もなく突立とつている。その上に意匠の技術を無視した色のわるいペンキ塗の広告がベタベタ貼はつてある。竹の葉きたなの汚きたならしく枯れた松飾りの間からは、家の軒のきごとに各自勝手

の幟のぼりや旗が出してあるのが、いずれも紫とか赤とかいう極めて単
純な色ばかりを拵えらんでいる。

自分は憤然として昔の深川を思返した。幸い乗換の切符は手
中うちにある。自分は浅間あさましいこの都会の中心から一飛びに深川へ行
こう——深川へ逃げて行こうという押えられぬ欲望に迫せめられた。

数年前まで、自分が日本を去るまで、水の深川は久しい間、あ
らゆる自分の趣味、恍惚こうこう、悲しみ、悦よろこびの感激を満足させてく
れた処であつた。電車はまだ布設されていなかったが既にその頃ころ
から、東京市街の美観は散々に破壊されていた中で、河を越した
彼かの場末の一劃ばかりがわずかに淋さびしく悲しい裏町の眺望ながめの中うちに、
衰残と零落とのいい尽つくし得ぬ純粹一致調和の美を味あじわわしてくれた

のである。

その頃、繁華な市中からこの深川へ来るには電車の便はなし、
 人力車は賃銭の高いばかりか何年間とも知れず永代橋の橋
 普請で、近所の往来は竹矢来で狭められ、小石や砂利で車の
 通れぬほど荒らされていた処から、誰れも彼れも、皆汐溜から
 出て三十間堀の堀割を通つて来る小さな石油の蒸汽船、もし
 くは、南八丁堀の河岸縁に、「出ますよ出ますよ」と呼び
 ながら一向出発せずに豆腐屋のような鈴ばかり鳴し立てている櫓
 舟に乗り、石川島を向うに望んで越前堀に添い、やがて、引
 汐上汐の波にゆられながら、印度洋でも横断するようにやつ
 との事で永代橋の河下を横ぎり、越中島から蛤町の

堀割に這入るのであつた。不動様のお三日という午過ぎなぞ参詣戻りの人々が筑波根、繭玉、成田山の提灯、泥細工の住みよしおどり
 吉踊の人形なぞ、さまざまな玩具を手にさげたその中にはねさが根下りの銀杏返しや印半纏の頭なども交つていて、幾艘の早舟は櫓の音を揃え、碇泊した荷舟の間をば声を掛け合い、静な潮に従つて流れて行く。水にうつる人々の衣服や玩具や提灯の色、それをば諸車止と高札打つたる朽ちた木の橋から欄干に凭れて眺め送る心地の如何に絵画的であつたらう。

夏中洲崎の遊廓に、燈籠の催しのあつた時分、夜おそく舟で通つた景色をも、自分は一生忘れまい。苦のかげから漏れる鈍い火影が、酒に酔つて喧嘩している裸体の船頭を照す。川添いの

小家こいえの裏窓から、いやらしい姿をした女が、文身ほりものした裸体はだかの男
 と酒を呑のんでいるのが見える。水門すいもんの忍返しのびがえしから老木おいぎの松が水
 の上に枝を延のばした庭構え、燈影ほかげしずかな料理屋の二階から芸者げいしや
 の歌う唄うたが聞える。月が出る。倉庫の屋根のかげになつて、片側
 は真まつくら暗かしぶちな河岸縁を新内しんないのながしが通る。水の光で明あかるく見える
 板橋の上を提灯つけた車が走る。それらの景色をばい知れず美
 しく悲しく感じて、満腔まんこうの詩情を托したその頃の自分は若いも
 のであつた。煩悶はんもんを知らなかつた。江戸趣味の恍惚こうこうのみに満
 足して、心は実に平和であつた。硯友社けんゆうしゃの芸術を立派なもの、
 新しいものだと思つていた。近松ちかまつや西鶴さいかくが残した文章で、如
 何なる感情の激動をもいい尽つくし得るものと安心していた。音波おんぱの

動揺、色彩の濃淡、空気の軽^{けいちよう}重、そんな事は少しも自分の神経を刺戟^{しげき}しなかつた。そんな事は芸術の範囲に入るべきものとは少しも予想しなかつた。日本は永久自分の住む処、日本語は永久自分の感情を自由にいい現^{あらわ}してくれるものだと思つて疑わなかつた。

自分は今、髯^{ひげ}をはやし、洋服を着ている。電気鉄道に乗つて、鉄で出来た永代橋を渡るのだ。時代の激変をどうして感ぜずにいられよう。

夕陽^{ゆうひ}は荷舟^{なふね}や檣^{ほぼしら}の輻^{ふく}輳^{そう}している越前堀^{えちぜんほり}からずっと遠くの方^{ほう}をば、眩^{まぶ}しく烟^{けむり}のように曇^{くも}らしている。影のように黒く立つ石川島^{いしかわじま}の前側に、いつも幾艘となく碇泊^{かきつ}している帆^ほ前船^{まえせん}の横腹は、赤

々と日の光に彩いろどられた。橋の下から湧わき昇る石炭の煙が、時々は
 先の見えぬほど、橋の上に立ち迷う。これだけは以前に変らぬ眺
 めであつたが、自分の眼は忽たちまち佃つくだじま島かなたの彼方から深川へとかけ
 られた一ひとすじ条の長い橋の姿に驚かされた。堤の上の小さい松の並
 木、橋の上の人影までが、はつきり絵のように見える。自分は永
 代橋の向むこうぎし岸で電車を下りた。その頃は殆ど門かどな並みに知ってい
 た深川の大通り。角かどの蛤はまぐりや屋には意気な女房がいた。名物の煎せ
 餅屋んべいやの娘はどうしたか知ら。一時跡あとかた方もなく消失きえうしてしまつ
 た二十歳時分の記憶を呼び返そうと、自分はきよろきよろしながら
 ら歩く。

無論それらしい娘も女房も今は見当てられようはずはない。し

かし深川の大通りは相変らず日あたりが悪く、妙にこの土地ばかり薄寒いような気がして、市中は風もなかったのに、此処では松かぎりの竹の葉がざわざわいつて動いている。よく見覚えのある深川座の幟のぼりがたった一本淋さびし氣げに、昔の通り、横町よこちようの曲まがりかどに立たつていたので、自分は道路の新しく取広げられたのをも殆ほとんど気付かず、心は全く十年前のなつかしい昔に立返る事が出来た。

つい名を忘れてしまった。思い出せない——一条の板橋を渡ると、やがて左へ曲る横町のぼりに幟のぼりの如く釣つるした幾筋いくすじの手拭てぬぐいが見える。紺と黒と柿色かきいろの配合が、全体に色のない場末の町とて殊ことさ更強さらく人目を牽ひく。自分は深川に名高い不動やしろの社であると、直すぐ

様さま思返してその方へ曲った。

細い溝とどぶにかかった石橋を前にして、「内陣ないじん、新吉原講しんよしわらこう」

と金字きんじで書いた鉄門をはいると、真直まっすぐな敷石道の左右に並ぶ休や

すみぢややのれん

茶屋の暖簾と、奉納の手拭が目覚めるばかり連続つながつて、その奥

深く石段を上った小高い処に、本殿の屋根が夕日を受けながら黒

く聳そびえている。参詣の人が二人三人と絶えず上り降りする石段の

下には易者の机や、筑波根売りの露店が二、三軒出ていた。その

そばに児守こもりや子供や人が大勢立止たちどまつていたので、何かと近いちかづ

見ると、坊主頭の老人が木魚もくぎよを叩たたいて阿呆陀羅経あほだらぎようをやっている

のであった。阿呆陀羅経のとなりには塵埃ほこりで灰色になった頭髪かみのけ

をぼうぼう生はやした盲目の男が、三味線しゃみせんを抱えて小さく身をかか

めながら蹲しゃがんでいた。阿呆陀羅經を聞き飽きた參詣戻りの人たちが三人四人立止る砂利の上の足音を聞分けて、盲目の男は懐ふところ中ちゅうに入れた櫛かしのぼちを取り出し、ちよつと調子をしらべる三の糸から直ぐチントンシャンと弾き出して、低い呂リョの声を咽喉のどへと呑み込んで、

あきイ——の夜よ

と長く引張ひっぱつたところで、つく息と共に汚い白眼しろめをきよろりとさせ、仰向あおもむける顔と共に首を斜めに振りながら、

夜よは——ア

と歌った。声は枯れている。三味線の一の糸には少しのさわりもない。けれども、歌うた出しの「秋——」という節ふしまわ廻しから拍子

芝居茶屋の混雑、お濠せうらいの座敷の緋毛氈ひもうせん、祭礼の万燈まんどう花笠はながさに酔えつたその眼は永久に光を失つたばかりに、かえつて浅間しい電車や電線や薄ツペらな西洋づくりを打仰ぐ不幸を知らない。よしまた、知つたにしても、こういう江戸ツ児こはわれら近代の人の如く熱烈な嫌悪けんおふんぬ憤怒を感じまい。我れながら解げせられぬ煩悶はんもんに苦しむような執着を持ってしまい。江戸の人は早く諦あきらめをつけてしまふ。すぐと自分で自分を冷笑する特徴をそなえているから。高い三の糸しきが頻りに響く。おとするものは——アと歌つて、盲も人うじんは首をひよいと前につき出し顔をしかめて、

鐘——エエばアかり——

という一番高い節廻ふしまわしをば枯れた自分の咽喉のどをよく承知して、巧たくみに

裏声を使つて逃げてしまつた。

夕日が左手の梅うめ林ばやしから流れて盲人の横顔を照てらす。しやがんだ哀れな影が如何いかにも薄うしろく後の石垣にうつつてゐる。石垣を築いた石の一片いっぺんごとに、奉納した人の名前が赤い字で彫りつけてある。芸者、芸人、鳶とび者もの、芝居の出方でかた、博奕打ばくちうち、皆近世に關係のない名ばかりである。

自分はふと後を振向いた。梅林の奥、公園外の低い人家の屋根を越して西の大空一帯に濃い紺色の夕雲が物すごい壁のように柵たを越して、沈む夕日は生血なまぢの滴したたる如くその間に燃えている。真赤まっかな色は驚くほど濃いが、光は弱く鈍り衰えている。自分は突然一種悲壯な感に打たれた。あの夕日の沈むところは早稲田わせだの森であろう

か。本郷ほんじょうの岡であろうか。自分の身は今如何に遠く、東洋の力ルチエ工・ラタンから離れているであろう。盲人は一曲終つてすぐさま、

「更ふけて逢あふ夜よの気苦あ勞よは——」と歌いつづける。

自分はいつまでも、いつまでも、暮行くこの深川の夕日を浴び、迷信の靈境なる本堂の石垣の下たたずに佇たんで、歌沢はうたの端唄はうたを聴きいていたいと思おもつた。永代えいたい橋ばしを渡わたつて歸かえつて行くのが堪たえられぬほど辛つらく思おもわれた。いつそ、明治が生んだ江戸追慕の詩人さいとうりよく斎藤さいとう緑りよく雨うの如ごとく滅ほろびてしままいたいような氣きがした。

ああ、しかし、自分は遂ついにに歸かえらねばなるまい。それが自分の運命おおくほだ、河を隔わて堀割ほりわりを越こえ坂あがを上あつて遠く行く、大久保おおくほの森もりのか

げ、自分の書齋の机にはワグナアの画像の下にニイチエの詩ザラ
ツストラの一卷が開かれたままに自分を待っている……

明治四十一年十二月作

青空文庫情報

底本：「すみだ川・新橋夜話 他一篇」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

2005（平成17）年11月25日第23刷発行

底本の親本：「荷風小説 二」岩波書店

1986（昭和61）年6月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：米田

2010年9月5日作成

2011年4月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

深川の唄

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>